HOKUGA 北海学園学術情報リポジトリ
学校法人北海学園
北海学園大学
北海商科大学

| | |
|---|---|
| タイトル | 無登録移民の物語とアメリカ：Reyna Grande の創作とアクティヴィズム |
| 著者 | 渡部，あさみ; WATANABE, Asami |
| 引用 | 北海学園大学人文論集(76): 47-84 |
| 発行日 | 2024-03-31 |

Hokkai-Gakuen Organization of Knowledge Ubiquitous through Gaining Archives.

# 無登録移民の物語とアメリカ：Reyna Grande の創作とアクティヴィズム

渡　部　あさみ

Reyna Grande はカリフォルニアで活動するメキシコ系アメリカ女性作家であり，ベストセラーとなった回想録作品 *The Distance Between Us: A Memoir*（2012）および *A Dream Called Home: A Memoir*（2018）の著者である。回想録では，1985 年の Grande が 9 才のときに親と再会するためにメキシコからアメリカの国境を渡る前後の経験が描かれている。作品では非正規にアメリカに滞在する移民である「無登録移民」（undocumented immigrant）の少女の体験を当事者視点から描き，アメリカン・ドリームを希求する個人の生存と成長の物語とともに，非正規移民を取り巻く社会的・政治的問題を広く伝えている。[1]

Grande は，回想録作品と *Across a Hundred Mountains*（2006），*Dancing with Butterflies*（2009），*A Ballad of Love and Glory*（2022）などの小説作品に加え，複数のアンソロジーに作品が収録されている。さらに，2022 年には（元）非正規移民の人々によるアンソロジーである *Somewhere We Are Human: Authentic Voices on Migration, Survival and New Beginnings* で，エクアドル出身の Sonia Guiñansaca と共に初めて編者を務め，企画，選考，推敲等に積極的に関わり制作を行った。Grande による回想録とアンソロジーは，最近まで語られてこなかった，現在約 1100 万人以上に上るといわれる無登録移民とその子どもたちの物語に焦点を当てている。また，Grande は，メキシコ系アメリカ女性作家 Gloria Anzaldúa（1942–2004）による創作上のコミュニティ形成の流れを受け継ぎ，顕著な人口増加により影響力を増している中南米系を中心としながら，その枠組みを越えた連帯の実現を目指し，活動を行っていると考えられる。そのため，本論では

Grandeの回想録とアンソロジーによる創作を通したコミュニティ形成の実践について，作品とインタビューの分析を通して検証し，現代のラテン系アメリカ文学およびアメリカ女性文学におけるGrandeの作品の位置づけについて考察する。

2020年の国勢調査によると，アメリカの総人口に占める人種・民族グループの構成割合は,「ヒスパニック系またはラテン系」が白人に次いで多く，過去10年で構成割合が約2.5%上昇し18.7%に成長した。[2] 人口としては6210万人に達し，アメリカ最大の人口規模のエスニック・グループとなっている。その中でもメキシコ人口は最も多い3590万人であり，全体のヒスパニック人口の58%を占めている。[3] メキシコ系アメリカ人は400年前から今日までアメリカに大量に移民し，移民として最も長い歴史を持つ一方で，1965年の移民法改正以降に移民してきた「新アメリカ人」(New Americans）と呼ばれる人々も多くいる。1965年以降の大量移民によるディアスポラ・コミュニティは，アメリカの南西部から全米各地に広がっている。[4] そのため，現代および未来のアメリカ社会は，メキシコを代表とするラテン系アメリカ人の存在をなくして語ることができないといえる。

一方,アメリカの主流文化メディアにおいては,ラテン系アメリカの人々の表象は限られてきた。しかし，人口成長に伴ってメキシコ系アメリカ人作家による文学も増加し，多様で幅広い作品が出版されている。[5] アメリカで移民に関する議論が二極化する中で，Grandeの回想録作品は非正規移民をめぐる無機質な統計データから個人に焦点を当て，非正規移民の子どもたちが強制されている困難，暴力，貧困などの問題を事例化して描き出している。また，この回想録は非正規移民となる背景，特に未成年者が国境を越える事例について，具体的かつ説得力のあるアプローチを提供し，メキシコ系アメリカ文学において重要視されている。[6]

ラテン系アメリカ文学の歴史においては，女性たちは主題として，著者として重要な役割を果たしてきた。21世紀のラテン系アメリカ女性文学においては，グローバリゼーションの中で，作家たちが国や都市の境界を越え，人種・ジェンダーの要素を取り込んで拡大し，アイデンティティの

表象はさらに複雑になっている。Grande の回想録作品も同様の特徴を持ち，トランスナショナルな物語の力と急速に変化するアメリカ，そして未来のコミュニティのあり方を理解する上でも重要な作品として位置づけられている。[7]

Grande 作品の回想録（memoir）という形式とジャンルについては，20 世紀後半に中南米の社会的・政治的変革をもたらすことを目指した自伝的作品であり，「証言」という意味を持つ「テスティモニオ」（testimonio）の文学の現在に続く影響力が見られることが指摘されている。具体的には，Grande の作品が，いわゆる「ドリーマーズ」（Dreamers）と呼ばれる，未成年の時に非正規移民の親に連れられてアメリカに入国した法的地位が不確定な若年者を救済する移民法改正を求めて，読者を動員することを目標としていることが挙げられる。加えて形式に関しては，Grande などのメキシコ系アメリカ女性文学において，ジェンダー，人種，階級の観点から移民経験の複雑性に取り組むための適切な表現を探る試みとして，ジャンルの垣根を越えて表現が行なわれている。つまり，Grande は回想録に加えて，口承文学，テスティモニオ，自伝の形式およびジャンルに同等に影響を受けた固有のライフ・ライティングであることが評価されている。[8]

文学研究の歴史において，Grande が選択した回想録形式は，自伝と比較して個人的かつ不完全であるとして否定的に評価されてきたが，現代アメリカ女性作家は自己表象のために回想録の形式を選択して利用する傾向が見られている。現代においては，人種，ジェンダー，階層などの文化的差異により，アイデンティティ形成の問題はより複雑になっているため，真実と一貫性が求められる自伝よりも想像力を取り入れることができるなど，回想録の方がより自由度が高く，創造の余地があり，適していることが理由として挙げられる。[9] さらに注目すべき動向は，近年メキシコ系アメリカ女性ジャーナリストによる回想録が続けて出版されていることである。特に，ラテン系アメリカ人を主な視聴者層として，米国 National Public Radio（NPR）で 30 年続くラジオ番組 *Latino USA* のパーソナリティであり，著名なメキシコ系アメリカ女性ジャーナリストである Maria

Hinojosa の *Once I Was You: A Memoir*（2021）や若手女性ジャーナリストである Jean Guerrero の Crux: *A Daughter's Quest for the Border-Crossing Father*（2023）は，近年出版され，話題となった。Grande は作家であるが，彼女の作品はジャーナリズムの特徴があることが指摘されている。

*Documenting the Undocumented: Latino/a Narratives and Social Justice in the Era of Operation Gatekeeper*（2016）によると，約20年に渡る移民法とその取り締まりの動向と激化する移民に対する排除と非難，それに対抗する移民による権利獲得運動に加え，Operation Gatekeeper による国境管理の強化および非正規移民に対する厳罰化を含む移民問題に対する連邦法である IIRIRA（Illegal Immigration Reform and Immigration Responsibility Act）の実施後，ラテン系アメリカ作家たちは，ますます非正規移民のテーマに注目するようになっている。[10] 非正規移民の北への旅にまつわる越境の際の失踪者や死者，入国してから続く強制送還に対する恐怖，家族別離などのトラウマは，主に1990年代以降のラテン系アメリカ作家による多くの作品において，テーマとして取り上げられてきた。Grande はこれらの作家たちの一人であり，作品は移民をめぐる実際の状況に対する「文学からの応答」（literary response）であり，「ナラティブ・ジャーナリズム」（narrative journalism）の作品として読まれている。[11]

文学作品は人々の想像力を顕著にかき立て，公的なディスコースの形成に特別な役割を果たすことができ，現実世界への影響についての一つの事例的なエビデンスを示して人々の関心を呼ぶ効果が指摘されている。映画，テレビ，ニュース雑誌，ウェブサイトなどの全てのメディアが公共の対話に少なからず寄与し，文学も同様に孤立して存在しておらず，人々の間に本に関する対話が生まれている。[12] 従来のメディアにおける非正規移民に関する支配的なレトリックは，非正規移民が「アメリカ」に属さず，そして「アメリカ人」には，決してなり得ないと考えるものであったが，ラテン系アメリカ作家や非正規移民自身による物語は，このような論調に対抗し始めている。Jose Antonio Vargas のような著名な非正規移民の人物たちは，非正規移民の声を一般の人々に広めるサポートをしている。

Vargas は SNS とテクノロジーに支えられたストーリー共有の時代に，「語ること」（story-telling）は現代の移民権利運動の中心であるとし，個人として，集団として物語を発信することを呼びかけている。[13]

Grande の作品においても，報道の対象となるべき深刻かつ重要な事実を，個人的な経験や感情も含めて効果的に伝える目的のために，回想録の形式が選択されていると考えられる。そして，移民問題に対する関心が高まっている近年においては特に，（元）非正規移民の物語はさまざまな形で語ることが重要視され，顕在化してきている。以上のように，ナラティブ・ジャーナリズムやテスティモニオ（証言文学）などの特徴を合わせ持つ Grande の回想録作品について，次に主題とともに検討していく。

## Reyna Grande の回想録作品

Reyna Grande の代表作となった回想録は，2012 年に出版された *The Distance Between Us: A Memoir*（以下 *The Distance*）と 2018 年の続編 *A Dream Called Home: A Memoir*（以下 *A Dream*）である。[14] *The Distance Between Us* は Book 1: “Mi Mami Me Ama (My Mommy Loves Me)” と Book 2: “The Man Behind the Glass”の 2 部に分かれている。前半の第 1 部では，Reyna の出生地であるメキシコのイグアラで過ごした幼少期の物語が描かれている。Reyna の父は絶望的な貧困から脱却する機会を求め，彼女が 2 才の時にアメリカでメキシコに家を建てる資金を得る目標を持ち非正規にアメリカに渡った。その 2 年後，彼女が 4 才の時に父は Reyna の母のみアメリカに呼び寄せたため，子どもたちは父方の祖母 Evila に預けられた。両親がアメリカに働きに出て不在の中，Evila は厳しく冷淡な女性で子どもたちの苦難が続いた。その後，アメリカで両親が離婚して母がメキシコに戻り，親子は母方の祖母 Chinta の家に移り生活を始める。Chinta は愛情深い女性であったが，生活はさらに貧しくなっていった。母は自己中心的でネグレクトの傾向があり，子どもたちに対して十分な愛情をかけられず，家出を繰り返すようになる。子どもたちは次第に幻滅して

いく中，アメリカに渡り8年間会っていない父を理想化し，父が困難な生活から救ってくれることを望むようになる。

後半では，1985年，Reynaが9才の時に父親の手配を得て入国したアメリカで，父とReynaを含む子どもたちとの生活が描かれる。家族で住むロサンゼルスは危険が多く，英語が話せないReynaは言語と文化の壁にぶつかり困難が絶えない。さらに，父は時に暴力的でアルコール依存があることがわかり，Reynaたちは不安な日々を送る。同時期にアメリカに渡って，生活を始めていた母からも助けは得られず，孤独を深めていく。Reynaは大学進学を機に家を離れ，大学でメキシコ系アメリカ文学やラテン系アメリカ文学の世界を知り，次第にそれまでの苦難の体験と記憶，父と母に対する期待と欲求を理解し，自立の道を歩み始める。

続編 *A Dream Called Home: A Memoir*（2018）は，Book 1: “Twice the Girl I Used to Be”とBook 2: “The Home I Carry”の2部に分かれている。前半では，カリフォルニア大学サンタクルーズ校（UCSC）で創作を学ぶ学生生活を描いている。白人の学生や教員からの無意識のステレオタイプ化による先入観や偏見に基づいたマイクロアグレッションによる疎外感，アメリカの高校生活でトラブルを抱えた妹との同居経験，そして創作のメンターとなる教員との出会い，さらにメキシコの伝統民族舞踊であるフォルクロリコ･グループへの参加を通じて，アメリカとメキシコのアイデンティティを受容するプロセスなどReynaの精神的な成長が描かれている。

後半では，Reynaの大学卒業後，生活のために必要となる仕事と創作のバランスに関する悩みや恋愛とシングルマザーとなる決断，その後のパートナーとなる相手との出会いについて書いている。回想録は，紆余曲折を経て作家として自立した後の数年間の生活を概説する短いエピローグで終わる。

彼女の回想録（*The Distance Between Us: A Memoir* と *A Dream Called Home: A Memoir*）のタイトルの一部である“distance”はメキシコとアメリカの距離，両親との間の地理的・心理的距離を表し，続編はアメリカン・ドリームをイメージさせ，Grandeの体験による“home”の意味の複層性を

示唆していると見られる。以下に原作を参照しながら，主題となるアメリカ，家族と親子関係，アイデンティティと創作について，さらに検討する。

Grande の回想録の冒頭では，アメリカをメキシコの代表的な伝説のモチーフである幽霊 La Llorona に喩えて表現している。伝説では，子どもを失った女性の幽霊が子どもを連れ去ってしまうが，幼い Reyna にとってアメリカは両親を奪う恐ろしいものであると考えている—“Neither of my grandmothers told us that there is something more powerful than La Llorona—a power that takes away parents, not children. It's called The United States” (*The Distance* 3).

父は 50 年来のメキシコの大不況を機に経済的な困難から脱出し，メキシコでは叶えられない，家を建てるという「夢」を持って資金を稼ぐために家族を残してアメリカへと国境を渡る決断をする—“It was the beginning of the worst recession Mexico had seen in fifty years, my father left to pursue a dream—to build us a house. Although he was a bricklayer and had built many houses, with Mexico's unstable economy he would never earn the money he needed to make his dream a reality” (*The Distance* 6).

そして 2 年後，父の呼び寄せによって母もアメリカへと渡ってしまい，その後 2 年半もの不在の期間を経て再会すると外見も人柄も異なり，Reyna の記憶の母ではなく，アメリカが母を別人に変えてしまったという喪失感があった—“Mami didn't look like the mother I had tried so hard not to forget during those two and a half years” (*The Distance* 70). しかし，アメリカに渡ってまもなく，両親は離婚してしまうことになり，単身では生計を立てられない母親は，失意のうちにメキシコに戻ってくる。Reyna は父が母子を捨て，同じくメキシコ系の女性である Mila と生活していることを知り，その理由に思いをめぐらしている。母は教育を十分に受けておらず，英語を話せない非正規移民である一方，Mila は英語が話せてアメリカで市民権を持ち，看護助手として働いている。そのため，父がその有利性と将来性から彼女を選んだのではないかと考え，アメリカで Mila が持つ地位と特権が夫婦と家族の関係に影響を及ぼしたと推測している。

> Was it that she was educated and was a nursing assistant, unlike my mother, who was only allowed a sixth-grade education? Or was it the fact that this woman was a naturalized U.S. citizen and could speak English, unlike my mother, who as hard as she tried, couldn't seem to make sense of the strange words that rolled off the tongues of Americans? Did my father see that woman and her American privileges as a way to a bigger future, a future that my mother, with her limitations, couldn't give him? (*The Distance* 84–85).

また，Reyna自身もアメリカに渡った後は，メキシコに住み続けている従姉妹たちから羨望の眼差しを受け，ディズニーランドのような場所に住んでいると思われていた。実際に故郷イグアラに戻り，従姉妹たちの貧しい生活を目の当たりにすると，Reynaは自身の恵まれた境遇と特権を強く意識している。アメリカは皆の憧れの地であり，メキシコでは彼女が努力をしても得られるはずがなかった機会が与えられる「魔法の国」であると考える—"I didn't live in Disneyland, but I did live in a magical place. I was reminded once again of the privilege of living in the U.S. Though it wasn't perfect, it was a place that allowed me to thrive. It was a place of opportunity, abundance, possibility, and dreams. Living there allowed me to have what I could never have had in Mexico—a college education, a well-paying job, my own house, my writing" (*A Dream* 228).

このように幼少のReynaたちの視点から見たアメリカはメキシコの民話に登場する，大切な家族を奪う恐ろしい幽霊に喩えられ，両親を連れ去って家族を引き離した。また，アメリカでの特権は，両親の関係も破壊する強大な影響力があると観察している。一方で，成長するにつれて，多くの人々に機会を与える可能性があり，夢を追求できる場所として認識し，相反する感情が内在する。

Reynaは幼い頃から両親と離れて暮らしていたことから，両親の不在中は理想化してしまう傾向があったが，現実には子どもたちに対する愛情表

現に乏しく，父はアルコールに依存し，母は自己中心的で子どもたちを顧みずに家出を繰り返すなどして，共に虐待的であった。子どもたちは親からの愛情を健気に求める一方，次第に幻滅していく。

しかし，父は子どもたちに，一貫して非正規移民であるからといって夢を諦めず，努力することを強調していた—“Just because we are *ilegales* doesn't mean we cannot dream” (*Dream* 8). また，父はアメリカで成功するために，教育の重要性を子どもたちに繰り返し説いていた—“Here in this country, if you aren't educated, you won't go very far. School is the key to the future. Without an education, you're nothing. So you kids have to study hard. You hear me? Do you hear me?” (*The Distance* 227).

アメリカへと渡った理由について，父は絶望的な貧困から脱出する貴重な機会であり，必然的な選択であったことを子どもたちに何度も伝えている。Reyna は言語と文化の差があり，アメリカ生活への適応に困難を感じていたが，父の教えに従って努力を続けていた。また，メキシコの故郷での親戚の生活環境の貧困の過酷さについて，成長するにつれて客観的に観察することができるようになったことにより，父が子に託す思いについても理解するようになっていった—“I thought about my father, the choice he had made to go north, and the price we had paid for that decision. [...] As Papi often said, my siblings and I had been given the opportunity of a lifetime. How could we let it go to waste? As I looked at my cousins walking down the dirt road, I thought of my father, of what he wanted our future to be like, and I understood” (*The Distance* 280).

父は子どもたちに夢を持ち，学業を重視することを伝えていたが，両親ともに英語が習得できず，アメリカでの生活には多くの苦労と不自由があった。子どもたちがアメリカの生活に次第に適応していくにつれて，父と母との心理的な距離は広がっていった。両親を観察し，Reyna は両親が両国のどちらにも属することができず，中間地帯となっている境界に「本当の両親」が亡霊のように囚われていると想像し，いつの日か戻ってきてくれることを願っていた—“I thought about the border that separates the

United States and Mexico. I wondered if during their crossing, both my father and mother had lost themselves in that no man's land. I wondered if my real parents were still there caught between two worlds. I imagined them trying to make their way back to us. I truly hoped that one day they would" (*The Distance* 315).

Grande の作品では，保護者のケア役割や子育てが重要な主題の一つとなっている。回想録の中の保護者との関係と子育てについては，Reyna の祖母，両親，妹，子どもたちとの関係から見ることができる。Reyna の保護者との関係と子育てに対する思考や方針は，彼女の移民経験と両親の言動に対する理解と解釈から始まっている。父が家族のためを思い決断したはずのアメリカへの移住が家族を壊したこと，妹 Betty にも及ぼした影響について振り返るといたたまれない気持ちになり，心を痛めていた—"'I'm sorry, Betty,' I said. And I meant I was sorry about everything, how immigration and separation had taken a toll on all of us, how even though our parents had emigrated from this very city to go to the U.S. to build us a house, they ended up destroying our home" (*A Dream* 55).

その後，Reyna が大学生になるとアメリカの学校生活に馴染まずトラブルを起こしたためにメキシコに帰されていた Betty を引き取ることを申し出たことにより Reyna は保護者役割の難しさを実体験する。Reyna は大学生活の傍ら，妹と同居してアメリカの高校に通わせて生活をサポートしようとするが，妹は隠れて無断欠席を繰り返すようになる。最終的に Betty が 16 才で妊娠したことから，妹が Reyna と同じ大学進学という目標を持つことはないという事実に直面し，保護者役割を断念することを決める—"For the first time, I understood that what I wanted for her—to do well in school, to go to college one day—wasn't what she wanted for herself. I could not give my dreams to her, she would have to find her own" (*A Dream* 87).

両親よりも共感性があり，上手に果たせるという自信を持って引き受けた妹 Betty の保護者役割であったが，思うようにならない子育ての擬似体

験による挫折を経て，父と母の気持ちを次第に理解していく様子が描かれている。Reyna は妹と子どもたちにも自身の経験を振り返り，子育ての見直しと試行錯誤を行なっている。また，窮地の妹に救いの手を差し伸べたことなど，自分が幼い頃にしてもらいたかったことを妹や子にすることで，自分の経験をより深く理解し，子ども時代の心の傷を癒そうとしているように見える。

保護者目線のケアの対象は，Reyna の子どもの頃と同じ境遇にある他の子どもたちにも向けられている。彼女は大学卒業後は作家として自立することを目標に執筆活動を続けながら，生活するために，そして学歴に見合う安定した職業を求めて中学校教師の職に就いた。勤務先の学校で ESL クラスを担当すると，家庭環境も含めて共通点が多いことに気がつき，Reyna は生徒たちに幼い頃の自分を重ねる。そして，生徒たちがアメリカン・ドリームを追うための困難に共感して寄り添い，支援を行う意思を強めていく—“I knew that many were undocumented, though I never asked. They didn't speak English, but in their eyes, I could see the desire to find a place to belong, a place where they could feel safe. Their stories were so similar to my own. Broken homes, broken families—that was the price we all had paid for a shot at the American Dream” (*A Dream* 188).

その後 Reyna はシングルマザーとなることを決め，姉の Mago と共に実際の子育てを通じて親の立場を経験し，それまでは子を顧みず自己中心的で否定的に見ていた両親に対して理解を示すことができるようになっていく。両親が故郷を離れる決断をし，アメリカに渡ってきたことは大変な勇気が必要なことであり，また，親であることは想像より複雑であることを身を持って学ぶ—“As adults, Mago and I were seeing things from the other side—as parents. For years we had criticized our father and mother for prioritizing their own needs above their children's. I was finally beginning to understand that it takes as much courage to leave as it does to stay, and that being a parent was way more complicated than I had ever imagined” (*A Dream* 306). Reyna が国境を超えた年と娘が同じ年齢になる

と，親として子に機会を与えようとした選択にも共感している―“My daughter is now the same age I was when I crossed the border and entered the U.S. I look at her and wonder: Would my own child survive what I survived? I don't know. What I do know is that if I were put in my father's place, I would do the same thing” (*A Dream* 322).

アメリカとメキシコの間で，複雑な生育環境で育った Reyna のアイデンティティ意識も複雑なものとなった。Reyna はメキシコ人としてもアメリカ人としても条件を十分に満たしておらず，境界に囚われ，境界が自身に内在しているような感覚を持っている。国境の中間地帯に囚われているような感覚は，かつて両親に対して想像していたことと同様であり，自分自身も変化してしまい，元の自分ではないように感じられた―“Because I was a child immigrant, my identity was split; I often felt like an outcast for not being completely Mexican but not fully American either. The border was still inside me. Physically I had crossed it, but psychologically I was still running across that no-man's-land. I was still caught back there, and so were my parents because the truth was that we were never the same after we crossed the border” (*A Dream* 35).

Reyna が以前の自分を失っていくように感じた一因として，アメリカの学校や職場に適応するために，アイデンティティを変えたり，時には偽ったりする必要が生じることを挙げている。Reyna も姉もアメリカ生活で受け入れられやすいように名前を変えたことや，適応のために行う大小の調整や変化が彼女たちのアイデンティティに次第に影響を及ぼしていくことを認識する―“I thought about how, upon border crossing, we take on new identities in subtle ways, and other times in drastic ways—like using a borrowed identity to work or having to lose one of our last names so that we can fit in. Hadn't I gone from being Reyna Grande Rodríguez in Mexico to simply Reyna Grande in the U.S.? Hadn't my sister gone from being Magloria to Maggie?” (*A Dream* 241).

さらに，Reyna がアイデンティティについて考えさせられる機会となっ

たのが，大学生になってから白人の学生から受けた“Where are you from?”という質問であった。白人学生からの質問は Reyna に対する関心を示し，無意識のバイアスによって悪気なく発せられているようであったが，マイクロアグレッションの代表的な例として取り上げられる質問である。Reyna のような移民にとって，この質問で求められている回答に関しては，住所，出身国，国籍，文化的アイデンティティなどの要素を思い浮かべて困惑させられ，警戒心を持つこともあった。何よりこのような質問をする者にとって，Reyna は「アメリカ人」として認められておらず，「外国人」であることを毎回強く意識させられている— The question always confused me when asked by a white person. Because I was an immigrant, the question “Where are you from?” made me wonder if I was being asked about the place of my birth, my nationality, my cultural identity, or simply the city where I now lived. It was innocent question, but it was a question that made me think about my foreignness, a question that made me raise my guard (*A Dream* 11).

Reyna はレーガン元大統領時代の不法就労対策のため，既にアメリカに入国していた非正規移民を合法化する「恩赦」（Amnesty）によって 1986 年に永住権を付与され，その後 2002 年にアメリカ市民となった。27 年間のアメリカ生活の中で，国籍を取得してアメリカを「故郷」（home）とすることができるようになり，作家となる夢も叶えることができた。これらの経験を通して，両方のアイデンティティの間の葛藤を乗り越え，自身にメキシコ系アメリカ人として二つの文化が内在していることを豊かさとして，肯定的に受容できるようになっていく。

> In 2002, I became a citizen of the United States. I have now been in this country for twenty-seven years. The United States is my home; it is the place that allowed me to dream, later, to make those dreams, and later, to make those dreams into realities. But my umbilical cord was buried in Iguala, and I have never forgotten where I came from.

I consider myself Mexican American because I am from both places. Both countries are within me. (*The Distance* 320)

作品中では，読書体験によるアイデンティティ形成への影響も読み取れる。中学生の時に，友達を作ることが得意ではなかった Reyna は毎週図書館でたくさん本を借りて読むようになり，物語の世界に没頭していた。Reyna は読書を通じて，ファンタジーの世界に自分の境遇を重ねて共感することや，アメリカを「部外者」（outsider）として観察していた。最初は故郷イグアラを想起させるようなおとぎ話を読み，その後，司書に勧められたアメリカの学校生活を舞台としたティーン向け小説である *Sweet Valley High* シリーズを好んで読むようになった。本の中のアメリカ生活は，Reyna の現実世界とは全く異なる世界の物語で，白人の上位中間層の生活を垣間見るような体験であり，白人少女による標準化された美の基準を体現する金髪碧眼で長身の登場人物との容姿や身体の差異を実感させられた―“I enjoyed the *Sweet Valley Junior High* and *Sweet Valley High* series, but those books had nothing to do with my own life. The characters were twin sisters who had sun-kissed blond hair, a golden tan, dazzling blue-green eyes, perfect size-six figures—characters whose world was so different from my own” (*The Distance* 241).

*Sweet Valley High* の物語の世界は Reyna が想像し，願望した完璧なアメリカ生活であった。しかし，現実の Reyna の家庭は心から休まる場所ではなく，それぞれ問題を抱える両親や強制送還の不安に怯える彼女の生活とは全く異なるものであった―“Those books gave me a glimpse into a world I wished to belong to, where there were no alcoholic fathers, no mothers who left you over and over again, no fear of deportation. I wondered what it would be like to live in a place like that. Their world was the perfect place I had imagined the U.S. to be” (*The Distance* 241).

Reyna は高校卒業後，コミュニティ・カレッジであるパサデナ・シティ・カレッジ（Pasadena City College）に進学すると，そこで出会った教員

Diana Savas から，ラテン系アメリカ文学やメキシコ系アメリカ文学について教えを受け，過去の読書体験を見直す機会を得る。Sandra Cisneros などのメキシコ系アメリカ人女性作家の作品を読むことによって，アメリカで同様の経験に基づき，創作を行う作家たちを新たに発見したことが大きな転機となった。Savas は Grande に作家の才能を見出し，作家になることを勧めた。

> I hadn't been exposed to Chicano Latino literature before. I spent too many years reading the wrong kind of books, like *Sweet Valley High* and the Harlequin romance novels I got addicted to in high school. I hadn't even known until then that Latino literature existed. Those books, like *The House on Mango Street*, proved a revelation. There were people out there who understood, who experienced the things I was going through. Diana planted a seed inside me, and through those books, the seed soon began to grow. (*The Distance* 306)

Reyna と家族は，世代を超えて受け継がれるトラウマとして認知され始めた「世代間トラウマ」（intergenerational trauma）と呼ばれる問題を抱えているように見られる。[15] 大人になって当時を振り返ると少女時代にメキシコやアメリカでの過酷な経験から，作者は抑うつ，不安やトラウマなどを患っていたが，当時は言語化することができなかった。父はその辛さをアルコールに頼って紛らわせ，Reyna は 13 才の時に自分の感情を物語に書いて表現するようになった。Reyna にとって書くことは記録し，記憶することであり，経験に意味を与える行為であった。さらに，書く行為は自分を救い出し，アメリカで生き残るために重要なこととなった— "Depression, anxiety, post-traumatic stress disorder—these words were not part of my vocabulary, so I never used them to describe how I felt. I expressed my feelings through stories while my father drowned his in a can of beer. I turned to writing to save myself, to record and remember, to

give meaning to my experiences. Writing was an act of survival" (*A Dream* 35).

その後 Reyna は，UCSC の 3 年次に編入学して創作を学ぶ中で，大学の創作プログラムが主催する講演会で初めて作家を職業とする日系アメリカ女性作家 Jeanne Wakatsuki Houston に出会ったことに触発され，彼女の *Farewell to Manzanar*（1973）に共感したことが語られている。この作品も回想録であり，第二次世界大戦中に強制収容所に収容されていた日系人家族の経験を書いたものである。Houston と同様に，有色人女性で移民として周縁化されること，常に「アメリカ人」であることを証明し，アメリカで生きていく権利をめぐって戦わなければならない境遇に共感している—"Though it was about the effects of the bombing of Pearl Harbor on Japanese American, I related to her story. As a woman of color and immigrant, I knew what it was like to be marginalized, to have to prove constantly how American I was, always to have to fight for my right to remain" (*A Dream* 126).

Grande は，メキシコ系の移民として，有色人女性として書くこと，そして，他の人が書くことを助けることに使命感と役割意識を感じるようになっていった。回想録のエピローグでは，アメリカに移民した人々が夢を追い，生き残るための支援を行う決意を表している。Reyna はアメリカが文化的差異を尊重し，固有の国へと発展していくために物語の力を信じていることが語られている。そして，Grande はかつての彼女のように非正規移民の立場であっても，アメリカで生きる移民による個人の物語に価値があり，重要なものであると考えている。

> Now more than ever, I am determined to write, and encourage others to write, stories that celebrate the resilience and tenacity of the millions of immigrants in the U.S. who fight every day for their dreams, for their right to remain, for their stories matter. I hope that by telling our stories we will help make the U.S. a place where we

> value our commonalities and respect our differences, where we celebrate the diversity that makes this country strong and unique, where every one of us—regardless of where we come from—knows that we belong. (*A Dream* 324)

## Reyna Grande と創作活動

次に作家の最近のインタビューから回想録の終盤で語られた創作活動の役割と影響について，さらに検討する。Grande は，2020 年のインタビュー（“How Writing Helped Free Reyna Grande”）において，子ども時代に両親からメキシコに取り残された経験から，親に必要とされず，愛されていないと感じるようになったことを告白している。それは子どもたちには辛い現実で，身近な人々から十分に愛情をかけてもらえなかったことは，長期間に渡って自尊心に影響を及ぼし，現在も父方の祖母の家に預けられていた時の心の傷を癒そうと努めていると語った。辛い過去と向き合う中で書くことの力を発見できたことは幸運であり，書く行為は自分の身体から毒素を取り出し，紙に置いて出していくようなイメージとなり，本が完成するとついに解放され，自由になったように感じたと説明している（I was very fortunate, because when I discovered writing, it allowed me... to remove all the toxicity in my body and just literally put it on the page.... And once I finished writing the book, I had gone through this process of transformation where I felt liberated）。また，書くプロセスの中で怒りと悲しみの過去の全ての経験が，現在の人生につながっていることを認識することができ，感謝の気持ちで満たされたと話している（Grande said that the process “filled me with gratitude, because I realized that so many of those things that I resented and that I wish had never happened are the very things that have now allowed me to have the life that I love）。

別のインタビュー（“Immigration and Transformation: My Literary Metamorphosis”）では，移民経験と書くことによってもたらされた変化に

焦点を当てている。書くことによる「文学的変身」(literary metamorphosis) を青虫から蝶へと成育する象徴的かつ創造的なイメージで，4 つのステージに分けて表現している。蝶は，世代交代しながら，南米から北米へと長距離を渡る種などがいることから，ハイチ出身のアメリカ女性作家 Edwidge Danticat も移民の比喩として注目している。[16] Grande は創作によって，人々の現実の見方をほんの少しでも変えられれば，世の中を書くことで変化させることができるとする James Baldwin による言葉を引用し，紹介している（You write in order to change the world [...]. If you alter, even by a millimeter, the way people look at reality, then you can change it)。

Grande にとって書く理由は，ライフ・ステージによって変化してきた。作者は，少女時代は，ただアメリカで生き残るために，そして傷ついた自分を救うために書いていた。大人になった現在は，少女の頃は想像もしなかった理由，つまり，他者，そして移民コミュニティのためであり，人々の意識改革と社会変化を求めて，アクティヴィズムの一環として書いていると述べている。

> My writing was not meant as political engagement. It was not an act of protest, not a call for social change or a demand for social justice. It was not an act of activism. I was not writing to raise my voice to speak up for my immigrant community. I was not writing to change other people's perception of the world. I wasn't using language to fight for human rights. Now I do write for all of these reasons and more. But back when I was a young girl, writing for me was simply an act of survival. I wasn't trying to save the world. I was trying to save myself.

創作を通じた成長の第一段階は「私の青虫のステージ」(Stage 1: My Caterpillar Stage) と呼ぶ時期であり，作者は移民経験とそのトラウマに苦しんでいた 13 才の頃に，感情を物語を通して表現するために書き始めた

（When I first put pen to paper at thirteen, I was a teenage girl suffering from extreme trauma caused by my immigrant experiences）。

次の「さなぎのステージ」（Stage 2: The Pupa Stage）では，高校卒業後，前述の進学先のコミュニティ・カレッジの教員が紹介してくれたラテン系アメリカ女性作家たちの作品に出会い，ついに自分自身を本の登場人物として想像することができた時期としている。それまでの読書体験では，自分が経験することができないアメリカ生活の物語を読んでいたため，ラテン系アメリカ人女性作家の描く物語とその世界を発見したことにより，大きく勇気づけられた（“Diana introduced me to Latina writers such as Helena María Viramontes, Isabel Allende, Sandra Cisneros, and Julia Alvarez. I could finally see myself in books. I no longer felt like an outsider looking through the window, but a family member invited over for dinner”）。

第 3 段階である「出現のステージ」（Stage 3: The Emerging Stage）では，James Baldwin の言葉の意図である創作の力と変化の可能性に気がついた時期であった。書くことによって自分が変化していき，それが世界を少しずつ変化させる力となる可能性を知る。作者が書くことによる変化を実感したこの段階が，その後の活動に発展し，最も重要であったと述べている（By using writing to transform myself, I realized that I could use it to transform the world—to change it in the way James Baldwin had meant. This was a crucial step for me because how can we push for social change if we, ourselves, don’t know what change feels like within our own being, from deep inside ourselves?）。

作家への成長の最終段階となる第 4 段階は「飛翔」（Stage 4: Taking Flight）のステージであり，この時期は移民コミュニティやマイノリティ女性が集団的トラウマを克服するため，物語の力を利用することを学んだ。2019 年のインタビュー時，人種差別的なスピーチを繰り返すトランプ元大統領の時代がついに終わるに際して，多くの人々が心の癒しを必要としている状況について指摘した（I have learned to use the power of language, of

stories, to fight for my immigrant community, for people of color, for women, to help my community overcome our collective trauma—and when this current administration finally ends, we all know we are going to need some mass-scale healing)。

このステージでは，作者は人々と協働することによって目標を達成することを目指し，自身を万華鏡のようなコミュニティの一部として捉えている。本を愛する人々が集まり，共に言語と文学を通して声を挙げ，インスピレーションを与え，変化を推進しようとしている。ここでは，アフリカ系アメリカ女性作家 Toni Morrison の発言（“We speak. We write. We do language and help our civilization heal.”）にも言及し，書き，語ることで実際の問題に関わっていく意思を明らかにしている。

> One of the most beautiful things about the stage where I am now is knowing that I'm not flying alone. I'm part of a kaleidoscope, a community. All of us who love books, we are all in this fight together—as writers, as readers, as human beings. We can use language and we can use literature to speak up, to advocate, to inspire, to create, to fight, to heal—but most of all, to transform ourselves and the world in which we live.

回想録の続編が出版された 2018 年のインタビュー（“Embedding Windows and Mirrors With Reyna Grande”）では，創作を通して，より具体的に移民政策の問題に関与し，想像の力によって支援を広げることを提言している。Grande は，非正規移民の子に対する一時的な措置である DACA（the Deferred Action for Childhood Arrivals）に関しても，積極的に意見している。Grande は DACA が一時的な法的保護と労働許可を与えるが，不十分な措置であり，子どもたちが積極的に未来を描けないという問題点を指摘している。Grande は，若年層の移民がアメリカン・ドリームを実現する機会を得る権利を求めるために，DACA に代わり非正規移

民の子に教育と雇用の機会を与え，一定の条件を満たすことにより，合法的な地位を得ることを可能とする法案である「ドリーム法」(Development, Relief, and Education for Alien Minors Act）を実現させることを支持している。[17]

Grande は元レーガン大統領時代の非正規移民対策により永住権を得た経緯があるが，現在は作者の幼少の頃と異なり，移民規制や取締り強化により国境を超えるリスクが当時に比べて格段に高まっている。このような状況を踏まえ，Grande は現在非正規の状態にある主に若年層の移民が，アメリカで夢を持てるように行動したいと考えている。そのためには，アメリカが国家として人道的かつ公正な移民法の改革をするべきであると主張している。

> Above all, I hope we can come together as a country to finally do right by our young immigrants and give them the opportunity to legalize their status and tell them, 'Yes, you belong here.' My book is about how immigration tore my family apart, and the price—not measured in dollars—that I paid for a shot at the American Dream. Year after year the price just keeps getting higher. I want the American Dream to remain within the reach of all young immigrants. For that to happen, we, as a country, need to support a comprehensive immigration reform that is humane and fair.

そして，Grande は彼女の回想録を通じて苦境にある非正規移民の子どもたちにインスピレーションを与えたいと考え，他者と協働することによってこれらの人々のアメリカの滞在を合法化し，アメリカを祖国とすることができるように願っている。

## Reyna Grande とアンソロジー制作によるアクティヴィズム

上記のように，Grande は非正規移民を取り巻く環境の改善に対して，文学を通じて役割を果たそうとしている。先述の回想録のように Grande は単著の著者として作品を発表してきたが，複数のアンソロジーの出版プロジェクトの寄稿者の一人としても貢献している。さらに最近では，編集者としても（元）無登録移民の人々のアンソロジーの編集と出版に積極的に関わり，人々の声を広める役割を担っている。

メキシコ系アメリカ女性作家であり，社会活動家であった Gloria Anzaldúa は代表作 *Borderland/La Frontera*（1987）の中で，散文，詩，逸話などの複数の形式を取り入れ，内在／外在する境界と自己のアイデンティティを想像的かつ創造的に探求した。Anzaldúa が編者を務めたアンソロジーである *The Bridge Called My Back*（1981）とその続編となった *This Bridge We Call Home*（2002）の出版も注目され，創作による共同体形成と社会運動への貢献を高く評価された。これらのアンソロジー制作のプロジェクトについて，Anzaldúa と Analouise Keating は編者として，アンソロジー制作をアクティヴィズム（anthology-making activism）と位置づけ，1980 年代当時マイノリティ女性の人種，ジェンダー，階層等の文化差とアイデンティティの問題を幅広く取り上げ，創作上の連帯を構築し，支持を得た。[18] Grande も近年のアンソロジー制作への参加によって，Anzaldúa の取り組みを現在に引き継ぎ，アクティヴィズムと創作上の連帯とコミュニティ形成に貢献していると考えられる。

Grande が参加しているアンソロジーのプロジェクトの中では，作者は主に回想録で取り上げたテーマをさらに探求し，アメリカと個人の複雑な関係性を描いている。[19] アンソロジーの特徴としては，メキシコ系や無登録移民による作品や，家族やカリフォルニアをテーマとした作品，トランプ大統領の当選を機会にマイノリティの人々が人種差別に対抗するメッセージが書簡形式で書かれている作品のアンソロジーなどがある。アメリカでは，テーマや特定の集団を設定して寄稿者を集めて制作されるアンソ

ロジーが多数出版されている。マイノリティの作家や作家志望の人々の作品を広く集め，アンソロジーの共同プロジェクトとすることによって出版を目指し，発表するケースが見られる。Grande が携わったアンソロジーは，時系列順に *Radical Hope: Letters of Love and Dissent in Dangerous Times.*（2017），*The Displaced: Refugee Writers on Refugee Lives*（2018），*Freeman's: California*（2019），*Nepantla Familias: An Anthology of Mexican American Literature on Families in Between Worlds*（2021），*Somewhere We Are Human: Authentic Voices on Migration, Survival, and New Beginnings*（2022）が出版されている。以下，出版年順に取り上げる。

*Radical Hope: Letters of Love and Dissent in Dangerous Times*（2017）は，人種差別的なスピーチや政策提言を含む選挙キャンペーンを行ったトランプ元大統領の 2016 年の当選を機に，作家たちによる抵抗運動として，愛する人々に書き送る手紙の形式を用いた作品によるアンソロジーである。Grande の作品は，"To My Goddaughter"と題し，自身の出身地であるメキシコのイグアラに住む従姉妹の娘であり，Grande が名付け親となっている少女 Reynita に宛てて 2016 年 12 月 22 日に書かれている。この手紙では，アメリカの未来に対する不安と怒りを綴り，母である従姉妹との記憶を思い起こしながら，その娘の将来を案じる内容となっている。Grande は，メキシコとその人々に対して，公然と偏見に満ち，人種差別的なスピーチを行うトランプ元大統領が当選したことが意味するアメリカの問題について，少女に伝えようとしている。

> We all felt a certain urgency to have you blessed and protected in these uncertain times. In a month, the country I've called home for more than thirty years will have a new leader, someone who cares nothing about you or me. Even before you were conceived, this man launched his campaign for president of the United States by calling Mexican immigrants "rapists, criminals, and drug dealers." He insulted all the family you have in the United States—your uncle

Ángel [...] and my siblings and me. (188–89)

Grande は名付け親としてイグアラの少女の未来について考え，将来に渡る支援を約束している。作者が幸運に助けられ，アメリカで永住権を得て努力し成功したことから，同様の境遇にある子どもたちに対する作者の罪悪感と使命感が見られる。この手紙には，少女にアメリカでチャンスを与えたいと願う気持ちとアメリカの深刻な人種差別問題に悲観する葛藤を少女に説明することを通して，移民であることが「スティグマ」となるようなアメリカの社会状況を厳しく批判している。アメリカはメキシコ人であることで「犯罪者」と呼ばれるなど侮辱されたり，非人間的な扱いを受けたりする不安がある。一方で，メキシコでは過酷な貧困問題があるが，国は自分たちのものであり，母語も文化的ルーツも諦める必要はない。そのため，トランプ元大統領が支持される時代であり，白人優位主義によってアメリカが分断されている事実を考えると，現時点ではアメリカに彼女を連れていくことを望まないと伝えている。

Today I wished I could take you with me. I wished I could find a way to defy everyone and everything that keeps me from doing so. But how could I turn you into an immigrant, especially now when I don't know what kind of challenges this new president will bring us? If you stay in Mexico, you'll never have to be an unwanted stranger in a new land. You'll never have to question your identity. You'll always be as Mexican as everyone around you. For better or worse, you will always belong to your country and it to you. You will never have to give up your native tongue or 194 cultural roots. You will never be accused of being a criminal. You will never be made to feel that you are not enough. The only thing against you is that you are poor. And though poverty brings many heartaches and sorrows, the stigma of being an immigrant, especially at times like now, isn't what I want

for you. (194–95)

2018 年には，*The Displaced: Refugee Writers on Refugee Lives* という「難民」をキーワードとした元難民のベトナム系アメリカ作家 Viet Than Nguyen が編集を務めたアンソロジーが制作され，2019 年には日本でも翻訳書が出版された。Grande は，“The Parent Who Stays”と題し，故国に子を置き去りにし，一緒に暮らすことができなかった Grande の両親について，やむを得ない理由から移民することを選ぶ背景と，その経験が親子に及ぼす影響について書いている。Grande の家族は「経済難民」という位置づけであり，アメリカ政府が保護の対象とした「紛争難民」ではなかった。しかし，父はメキシコでは家族を養えない経済的苦境に絶望し，避難が必要な状況と考えた上で祖国を脱出している。そのため，Grande は，メキシコの深刻な社会的・政治的問題により，両親にとって国境を越えることは必然的な選択であったと考えている—“My parents didn’t leave Mexico, they fled—not for their lives, but for life-seeking economic refuge from a country that couldn’t or wouldn’t give them the means to provide for their family. Mexico had failed them, and so they fled across the border to pursue the dream to give us a house and a better life” (81).

しかし，家族一緒に国境を越えることは叶わなかったため，Grande は 2 才の時に生き別れ，長年会えずに他人同然となっていた父の手配により，国境を渡ることになった。そのような経緯で，作者は 9 才半の時に知らない間に「不法」（illegal）移民となってしまった—“This stranger, my father, had borrowed money from everyone he knew and hired a smuggler to take me and my siblings north to his home in the United States, where we were to begin a new life together. So, at the age of nine-and-a-half, I found myself at the U.S. border and became an ‘illegal’ human being by crossing without permission for a chance to finally have a family” (81).

作者はこの作品を通して，難民も非正規移民も，それぞれ個人が共通して生死のリスクを顧みずアメリカへと渡る原因となった祖国でのトラウ

マ，そして，アメリカで移民として経験する困難など，皆が同様のトラウマを抱えていることを訴えている―“Yet, what all displaced people have most in common, regardless of where we come from, regardless if we are ‘official’ refugees or ‘illegal’ immigrants, is our trauma. The trauma that propels us to this land, and the traumatic experiences that await us” (82).

次に出版された *Freeman's: California* (2019) は，カリフォルニアをテーマとしたアンソロジーであり，作者は“My Mother's California”というタイトルで，地域によって階層化された，母と娘が住む異なるカリフォルニアの姿を題材に書いている。母親は経済的事情により，同じカリフォルニアでも Reyna が住む場所とは全く別世界に感じられるようなダウンタウン中心部の犯罪多発地区に住んでいる―“We entered another world when we visited her in downtown L.A. My mother's neighborhood near Skid Row made us wonder if we were still in California and not in a third-world country like the one we'd left behind” (180–81). 一方で，Reyna は大学生として住んだサンタクルーズをおとぎ話のようなカリフォルニアと表現している―“When I arrived in Santa Cruz, I felt as if I had been given access to another, better version of California—a fairy tale version” (182).

母は Reyna が 4 才半の時に子どもたちを置いてアメリカへと渡り，数年後に戻ってきたときには Reyna の記憶の中の同じ母ではなく別人のように変化していた。Reyna は母に対して喪失感があり，それぞれが同じカリフォルニアに住むようになっても，母子の価値観も生活環境も異なっていて，心理的距離も縮まることはなかった。

> When I was four-and-a-half years old, my mother left me in Mexico, along with my older siblings, to come to California and be reunited with my father, who had left two years earlier. When she'd announced her departure, the first thing I asked was, “How long will you be gone?” “Not too long,” she replied. But “not too long” turned out to be “never” because she was never the same mother to me

> after she crossed the border. The little girl in me is still waiting for my mami to return. (177)

Reyna の方もアメリカに渡って学校教育を受けて英語を習得し，文化に適応するようになると，英語を学ぶことを拒否する母親に対して否定的な感情を持つようになっていった。Reyna たちはアメリカ生活の中で，次第に標準的なアメリカの価値を内面化して，母が象徴する属性を見下し，拒絶するようになったと分析している。結果として Reyna たちは，自分たちが手にしたアメリカの中間層の生活から母を排除してしまうようになり，二人は同じカリフォルニアにいながらも地域と文化の異なる世界にそれぞれ住むようになった経緯を語っている。

> We began to reject our mother and everything she represented. To our Americanized eyes, she was a symbol of what we didn't want to be—a working-class, uneducated, non-English-speaking immigrant. The more we were educated in U.S. schools and the more we assimilated, the more we internalized the disdain American society has for someone like my mother. My siblings and I spoke English all the time, and consciously and unconsciously, we excluded our mother from all our conversations and eventually, our middle-class American lives. (181)

次に制作された *Nepantla Familias: An Anthology of Mexican American Literature on Families in Between Worlds*（2021）は，家族と両国の文化をテーマとしたメキシコ系アメリカ文学のアンソロジーである。Grande は，“Losing My Mother Tongue”と題して，前アンソロジー作品“My Mother's California”と共通して，母親と母語の喪失や言語体験とアイデンティティの変化などの問題について取り上げている。Grande はアメリカに移民し，学校で英語のみ使用することが許可される環境で教育を受けたことによ

り，スペイン語で書くことができなくなったことに対する喪失感を書いている。作者は9才で移民した時に，生命リスクの他，認識しないうちに母語を失うリスクを負ったという―“When I crossed the border at nine years old, I didn't know that in addition to putting my life at risk, I was also risking the loss of my mother tongue” (27).

作者がメキシコとアメリカの両国を主題にして創作をしていると，読者から母語であるスペイン語で創作しない理由についてしばしば質問を受け，メキシコ人でありながら，母語で書かないことを疑問視されることがある。Grande はスペイン語に対する劣等感と言語習得経験に大きなトラウマがあり，「英語優勢」(English dominant) という個人の言語使用状況を示す表現がより不穏な意味を持っている。作者にとっては，英語がより流暢であるという意味ではなく，英語が優勢に自身を「支配する」(dominate) という意味を持つ状態であることを明かしている。また，スペイン語を創作に取り入れないことは，作家のアイデンティティを疑問視されることにもつながっているという―“Why don't you write in your mother tongue? What kind of Mexican are you? The kind who can't write in Spanish, I want to say. The kind who was so traumatized by her language acquisition that the term “English dominant” took on a more sinister meaning: I don't dominate English; English dominates me” (30).

作者は，かつてスペイン語で書こうと試みたが，それは辛い経験となった。適切な言葉が出て来ず，スペイン語が英語の奥深くに埋没しているので，記憶の中から掘り起こすのは多大な努力が必要となった―“There have been a couple of times when I've tried to write in Spanish, but it is a painful experience. The words don't come; they remain so buried beneath the English words that it takes tremendous amount of effort to dig through my memory and unearth them” (30).

スペイン語の喪失は，書くことに影響があっただけではなく，家族との関係にも影を落とした。とりわけ英語を学ぼうとしなかった母との間に隔たりを生んだ。しかし，「アメリカナイズ」(Americanized) された少女に

は，母の英語を学ぶことに対する拒絶が弱さや敗北に映り，英語への言語シフトは母との関係に影響を及ぼした―“Besides impacting my writing, my language loss has also affected my relationship with my family. Mostly, it created a distance between me and my mother, who never learned English. But as newly ‘Americanized’ girl, I saw my mother’s refusal to learn English as a weakness and failure” (32).

Grande は今もスペイン語が書けないことを恥じていて，英語の使用を強制する教育を行った学校や社会から受けたダメージから回復できていない。母と母語の両方の喪失をもたらした言語トラウマは，移民としてのアイデンティティ，さらに娘，母親としての作者のアイデンティティ形成に影響を与えたことを強調している―“I am still dealing with the damage caused by educational and social institutions that shamed me into speaking only English. I haven’t finished taking stock of the effects of my language trauma, of how it impacted my identity as an immigrant, a daughter, and a mother” (36).

最後に，最も新しく出版されたアンソロジーである *Somewhere We Are Human: Authentic Voices on Migration, Survival, and New Beginnings*（2022）は，（元）非正規移民の編者と寄稿者によるコレクションであり，Grande が初めて女性編者の役割を担った。序章は，先述の *Displaced: Refugee Writers on Refugee Lives* のアンソロジーの編者であり，*Radical Hope: Letters of Love and Dissent in Dangerous Times* の寄稿者である元難民のベトナム系アメリカ作家 Viet Thanh Nguyen が引き受けている。Grande と Nguyen は，両作家ともに移民の問題に取り組む作家たちであり，創作を通した協力関係が見られる。

このアンソロジーの協力者および寄稿者の選考プロセスは，二段階で行われた。最初は編者二人が協力を依頼したいと考える作家やアーティスト，移民運動の活動家など，既に高い評価を得ている人々を対象としてリストを作成した。そして，新型コロナウイルス流行下の 2020 年 10 月には，オンラインで一般の人々にも呼びかけ，多くの応募を得た後，寄稿者と共

に対話を重ねて編集作業を進めていった。最終的には多様な背景と目的を持つ人々が，家族関係，気候変動，リプロダクティブ・ライツ，LGBTQの権利などの問題に取り組み，自己のアイデンティティをテーマに祖国と移民先国との関係性を模索する（元）無登録移民によるエッセイ，詩，芸術作品のコレクションが完成した。編者はこのプロジェクトを通して，人々の不屈の精神とレジリエンス，そして希望に満ちた力強い物語が集まり，アンソロジーがコミュニティの素晴らしい才能を祝福するものとなったと紹介している。[20]

Grandeは編者であり，元無登録移民として，移民が生きる現実と複雑な問題とともに移民の人々の人間性を反映し，存在を証明する物語が出版され広く認知されることを求めてきた。このアンソロジーは，移民政策に貢献することを願って制作され，様々な現代の移民をめぐる課題を取り上げるプロジェクトとなっている―“We craved narratives that spoke to our reality as immigrants and the complexity of being undocumented; stories that reflected our humanity; where we felt seen and heard. With this collection, we hope to contribute to the ongoing and evolving conversation about immigration policy and justice by centering authentic stories of immigrants” (xv-xvi).

本作の序文を担当したViet Thanh Nguyenは，このアンソロジーがアメリカの移民と外国人に対する偏見や恐怖などによるゼノフォビアのパラドックスの問題を取り上げ，新しい移民が非人道的な扱いを受けていることを告発している。このように移民の人間性が疑問視されていること，新天地を求めてアメリカに来る移民の多くの物語が，生存をかけた熾烈なサバイバルの物語になっている事実を指摘している。[21]

Nguyenは，書類記録のない「無登録移民」（undocumented immigrant）の人々にとって，「自分たちを記録する」（documenting themselves）試みとして，このアンソロジーが無登録移民の文学の礎となり，この国の可能性を考える上で想像力に訴えるものとなることを願うメッセージを発信している―“While these writers may be undocumented in a legal sense, they

are documenting themselves, and this country, through their writing. May this anthology be cornerstone of an undocumented literature that galvanizes our collective conscience and imagination over what is possible for this country" (xii-xiii).

Grande による"Not So Sweet Valley"と題したエッセイでは，回想録の扱う時代の中では取り上げられなかった，作者の子どもたちとの母子関係について取り上げている。Grande が経済的な豊かさを得て，二人の子の生活が自身の子ども時代の生活とは大きく異なることによって生じた子との間の心理的距離に注目している。そして，その隔たりが自身の選択によるものであり，受容しなければいけないと考える葛藤があることを語っている—"What is beyond my reach, though—at times—is coming to terms with my children's childhoods being vastly different from mine and accepting that the distance between me and my children was of my own making" (244).

作者は，子どもの頃に本で読んだアメリカの少女たちの生活に憧れ，その生活を手に入れ，子どもたちにも与えられるように一生懸命に努力してきた。作者は「移民」「低所得者」「英語学習者」などコンプレックスとなっていた属性を，母として子にはまず第一に排除してあげることを目標としていた。しかし，アメリカで育った子とは予期せぬ問題に直面した。

> My first act of love as a mother was to remove from my children's lives the labels I grew up with—low-income, immigrant, English language learner, first-generation college student. My son and daughter will never face the daily struggles I encountered as I fought for my place in this society, for my right to remain and become a part of the fabric of this country. But neither my college degree, nor my writing career, nor my perfect English prepared me for the experience of raising two American-born, upper middle-class children. (246)

Grandeが経済的に余裕のある生活を手に入れると，子が物を大事にしなかったり，贅沢に感じたりした。しかし，それは幼少期に抱いていた作者の欲求を，子どもを通して満たそうと過剰に買い与えるなど，多分に母親である自分に原因があることを自覚し，罪悪感が湧いた。同時に子どもたちが，自分がついていくことができない遠い場所へと行ってしまったような寂しさを覚えた。

それでも，このような状況はアメリカに渡った父と同様にアメリカで生きることを選択した結果であり，その代償として受容しようと考える日々の悩みと葛藤を吐露している。その後，不自由のない暮らしをしている子どもたちにイグアラの生活を体験させようと旅をして，Grandeの娘が現地の子が娘自身に似ていると発言し，共感を寄せたことを確認したことが救いとなる。Grandeは現地の子に幼い頃の自分を投影していたため，娘とのイグアラでの経験の共有により，娘との距離が少し近づいたように感じられたと解釈できる。娘の現地の子に対する共感に救われ，アメリカン・ドリームの追求で失ったものや移民経験に対する否定的な感情を乗り越えられる可能性が確認できる。

> In that moment, my daughter's words were a soothing salve on the shame of what my American Dream has cost me. I began to realize that I should stop begrudging my children the life I've given them. If the worst that has happened to them is to live a *Sweet Valley High* kind of life, I am willing to pay the price, like my father once did. Even if the story I've written for them feels foreign to me. (251)

上記のようにGrandeは，協力者であり編者としてアンソロジー制作に携わり，移民経験と家族，そしてアメリカについて，ライフ・ステージにより変化していく関係性と感情を描き出している。これらの主題は，回想録とアンソロジー作品を合わせて読むことにより深まり，さらに具体性を持って明らかになる。

## Reyna Grande の作品と 21 世紀アメリカ女性文学

21 世紀のメキシコ系を中心とするラテン系アメリカ文学は，過去に見過ごされてきた状況や人物像を取り上げ，その焦点と範囲を拡大している。ラテン系アメリカ文学では，明示的または暗示的に文学を用いてアクティビズムに関わってきた歴史があり，現代において，新しいアプローチと主題でアメリカとの関係に取り組み，自分たちを再創造しようとする動向が確認されている。

そして，ラテン系アメリカの人々はアメリカ全体とより広くつながるために，かつてのように孤立せず，異なる人種・エスニシティの人々と対話し，アメリカの将来に積極的に関わっていく姿勢が見られている。ラテン系アメリカ人は，人口増加によって得られた新たな社会的・経済的影響力を行使し，実際の問題に取り組んできた。ラテン系アメリカ文学は，これらの実績を直接反映しており，より大きな挑戦に備えているとされ，今後の発展が期待されている。[22]

Grande は彼女の体験と成長を，元無登録移民の子の視点から回想録を通じて伝えている。現代アメリカ女性作家が戦略的に利用してきた回想録の形式による作者の個人的な物語は，多くの読者の共感を呼び，その体験を広める効果があった。さらに，Grande の創作活動には，メキシコ系アメリカ女性作家 Gloria Anzaldúa が 1980 年代に行っていた，アンソロジー制作を通して形成された創作コミュニティによるアクティビズムの影響が見られる。Grande は，これまで見過ごされていた新しい視点から「アメリカ」を回想録とアンソロジーで描き，寄稿者として，そして編者として連帯する創作を通じたコミュニティを実現させ，アクティヴィズムに関わるマイノリティ女性による現代アメリカ女性文学の流れを受け継いでいると考えられる。以上のように，作者は人種やエスニシティを超えた物語の共有を通して他者とつながり，コミュニティ形成を支援し，その発展に貢献していることが確認された。

## 注

本研究は，令和 4 年度北海学園大学学術研究助成による研究成果の一部である。

---

[1] 作者の情報については，“Grande, Reyna”（Urioste et al. 2017, 141–43）や公式ウェブサイト（https://reynagrande.com/）を主に参照した。アメリカにおいて，“undocumented immigrant”は滞在や移民に関して正式な許可を得ていない，あるいは許可が失効した状態にある人々を指して一般的に使用されている。和書では「書類不備移民」と訳されることがあるが，本論では，下記情報を参照し，「無登録移民」または「非正規移民」と訳している。「在留資格のない移民・難民を不法と呼ばず非正規や無登録と呼ぼう！」(移住者と連帯する全国ネットワーク「移住連」ウェブサイト）
https://migrants.jp/news/others/230601.html.

[2] 「地域・分析レポート：米国勢調査の最新結果から人口動態変化を読み解く」日本貿易振興機構，2021 年 10 月 14 日。
https://www.jetro.go.jp/biz/areareports/2021/e7aa675053264220.html.（2023 年 1 月 31 日閲覧）

[3] “Eight Hispanic Groups Each Had a Million or More Population in 2020” United States Census Bureau. 26 Sep. 2023. https://www.census.gov/library/stories/2023/09/2020-census-dhc-a-hispanic-population.html.（2023 年 1 月 31 日閲覧）

[4] “Introduction” (Waters et al. 1–13), “Mexico” (Carmarillo 504–17).

[5] “Mexican American (Chicana/o)” (Aldama 187–200).

[6] “Literary Representations of Migration” (Moreno 1219–40).

[7] “Women’s Literature” (Urioste et al. 323–330). 本書では，Juanita Heredia の Grande 作品を含む 21 世紀ラテン系アメリカ女性文学研究について言及している。詳細については，（Heredia 2009）を参照した。

[8] Rohrleitner 43–51.

[9] 渡部　2009, 39–45.

[10] Operation Gatekeeper と IIRIRA については，以下を参照した。
“Background to the Office of the Inspector General Investigation.” U. S. Department of Justice Office of the Inspector General.
https: //oig. justice. gov/sites/default/files/archive/special/9807/gkp01. htm.（2023 年 1 月 31 日閲覧）

"Illegal Immigration Reform and Immigration Responsibility Act." Cornell Law School Legal Information Institute. https://www.law.cornell.edu/wex/illegal_immigration_reform_and_immigration_responsibility_act.（2023 年 1 月 31 日閲覧）

[11] Caminero-Santangelo 7.

[12] Caminero-Santangelo 54–55.

[13] Caminero-Santangelo 260–63. 本書では，Jose Antonio Vargas が人々に SNS などのテクノロジーを利用して，広く「語ること」を呼びかける 2012 年夏の Facebook の投稿を引用している。Vargas の現在の活動については，Jose Antonio Vargas の公式ウェブサイト（https://joseantoniovargas.com/）を参照した。

[14] 本論では，回想録や一部のアンソロジーの作者は，登場人物の少女であるため，文脈に合わせて作中と同様に Reyna と名前で表記している。

[15] Zimmerman, Rachel. "How does trauma spill from one generation to the next? Intergenerational trauma has become a hot topic as people seek to explain the poor state of mental health among younger generations." *Washington Post*, 12 Jun. 2023. https://www.washingtonpost.com/wellness/2023/06/12/generational-trauma-passed-healing/.（2023 年 1 月 31 日閲覧）

[16] 渡部　2011, 35–36.

[17] DACA については，American Immigration Council "Deferred Action for Childhood Arrivals: A Q&A Guide" 17 Aug. 2012. https://www.americanimmigrationcouncil.org/research/deferred-action-childhood-arrivals-qa-guide.（2023 年 1 月 31 日閲覧）
DREAM Act については，American Immigration Council. "The Dream Act: An Overview" 16, Mar. 2021. https://www.americanimmigrationcouncil.org/research/dream-act-overview.（2023 年 1 月 31 日閲覧）

[18] 渡部　2013, 120–21.

[19] Grande の作品を含むアンソロジー *Latinas in Lotusland: An Anthology of Contemporary Southern California Literature*（2008）のみ短編小説を収録しているため，本論では除外した。

[20] Grande と Guiñansaca による本アンソロジーの編集方針と特徴については，"Editor's Note"（Grande and Guiñansaca xv-xvii）を参照した。

[21] Nguyen の序文については，“Forward”（Nguyen xii-xiii）を参照した。

[22] “Introduction” (Urioste et al. 24–25).

## 参考文献


Aldama, Frederick Luis. “Mexican American (Chicana/o).” *The Oxford Encyclopedia of Latina and Latino Literature*, edited by Louis G. Mendoza, vol. 1, Oxford UP, 2020, pp. 187–200.

Anzaldúa, Gloria. *Borderland/La Frontera*. Aunt Lute, 1987.

Anzaldúa, Gloria. *Making Face, Making Soul/Haciendo Caras: Creative and Critical Perspectives by Feminists of Color*. Aunte Lute, 1990.

Anzaldúa, Gloria, and Anna Louise Keating, editors. *This Bridge Called My Home*. Routledge, 2002.

Carmillo, Albert M. “Mexico” *The New Americans: A Guide to Immigration Since 1965*. edited by Mary C. Waters, et al., Harvard UP, 2007.

Caminero-Santangelo, Marta. *Documenting the Undocumented: Latino/a Narratives and Social Justice in the Era of Operation Gatekeeper*. UP of Florida, 2016.

De Robertis, Carolina, editor. *Radical Hope: Letters of Love and Dissent in Dangerous Times*. Vintage Press, 2017.

Freeman, John, editor. *Freeman’s: California*. Grove Press, 2019.

Grande, Reyna and Sonia Guiñansaca, editors. *Somewhere We Are Human: Authentic Voices on Migration, Survival, and New Beginnings*. Harper Collins, 2022.

Grande, Reyna. *The Distance Between Us: A Memoir*. Washington Square Press, 2012.

————. *The Dream Called Home: A Memoir*. Washington Square Press, 2018.

————. “To My Goddaughter.” *Radical Hope: Letters of Love and Dissent in Dangerous Times*, edited by Carolina De Robertis, Vintage Press, 2017.

————. “The Parent Who Stays.” *The Displaced: Refugee Writers on Refugee Lives*, edited by Viet Thanh Nguyen, et al., Abrams Press, 2018.

————. “My Mother’s California.” *Freeman’s: California*, edited by John Freeman, Grove Press, 2019.

————. “Losing My Mother Tongue.” *Nepantla Familias: An Anthology of Mexican American Literature on Families in Between Worlds*, edited by

Sergio Troncoso, Texas A & M UP, 2021.

————. “Not So Sweet Valley” *Somewhere We Are Human: Authentic Voices on Migration, Survival, and New Beginnings*, edited by Reyna Grande and Sonia Guiñansaca, Harper Collins, 2022.

————. “Immigration and Transformation: My Literary Metamorphosis.” *World Literature Today*. Autumn 2019. https://www.worldliteraturetoday.org/2019/autumn/immigration-and-transformation-my-literary-metamorphosis-reyna-grande. Accessed 31 Jan. 2023.

Grande, Reyna and Sonia Guiñansaca. “Editor’s Note” *Somewhere We Are Human: Authentic Voices on Migration, Survival, and New Beginnings*, edited by Reyna Grande and Sonia Guiñansaca, Harper Collins, 2022, pp. xv-xix.

Guerrero, Jean. *Crux: A Daughter’s Quest for the Border-Crossing Father*. Oneworld, 2023.

Hauptman, Ally and Michelle Hasty. “Embedding Windows and Mirrors With Reyna Grande.” *International Literacy Association*. 10 May, 2018. https://www.literacyworldwide.org/blog/literacy-now/2018/05/10/embedding-windows-and-mirrors-with-reyna-grande. Accessed 31 Jan. 2023.

Heredia, Juanita. *Transnational Latina Narratives in the Twenty-first Century: The Politics of Gender, Race, and Migrations*. Palgrave Macmillan, 2009.

Hinojosa, Maria. *Once I Was You: A Memoir*. Atria Books, 2021.

Mcmurtrie, John. “Event Recap: How Writing Helped Free Reyna Grande: The author of Alta’s California Book Club November pick shares her journey.” 21 Nov. 2020. https://www.altaonline.com/california-book-club/a34744399/how-writing-helped-free-reyna-grande/. Accessed 31 Jan. 2023.

Moraga, Cherrie and Gloria Anzaldú, editors. *This Bridge Called My Back: Writings By Radical Women of Color*. Third Woman Press, 1983.

Moreno, Marisel. “Literary Representations of Migration.” *The Oxford Encyclopedia of Latina and Latino Literature*, edited by Louis G. Mendoza, vol. 2, Oxford UP, 2020, pp. 1219–40.

Nguyen, Viet Thanh, et al., editors. *The Displaced: Refugee Writers on Refugee Lives*. Abrams Press, 2018.

Nguyen, Viet Thanh. “Forward.” *Somewhere We Are Human: Authentic Voices on Migration, Survival, and New Beginnings*, edited by Reyna Grande and Sonia Guiñansaca, Harper Collins, 2022, pp. xi-xix.

Olivas, Daniel A., editor. *Latinos in Lotusland: An Anthology of Contemporary Southern California Literature*. Bilingual Press, 2008.

Rohrleitner, Marion. “Chicana Memoir and the DREAMer Generation: Reyna Grande’s *The Distance Between Us* as Neo-colonial Critique and Feminist Testimonio.” *Gender a výzkum / Gender and Research*, Vol. 18, No. 2, 2017, pp. 36–54.

Troncoso, Sergio, editor. *Nepantla Familias: An Anthology of Mexican American Literature on Families in Between Worlds*. Texas A & M UP, 2021.

Urioste, Donaldo W., et al. “Grande, Reyna.” *Historical Dictionary of U.S. Latino Literature*, edited by Donaldo W. Urioste, et al., Rowman and Littlefield, 2017, pp. 141–43.

Urioste, Donaldo W., et al. “Women’s Literature.” *Historical Dictionary of U.S. Latino Literature*, edited by Donaldo W. Urioste, et al., Rowman and Littlefield, 2017, pp. 323–30.

Watanabe, Asami. “Contemporary American Women’s Memoir and Theories in Life Writing.”『札幌大学女子短期大学部紀要―創立 40 周年記念号―』第 52・53 合併号，2009 年，39–54 頁。

Watanabe, Asami. “Living Sin Froteras: Transforming Body and Ethnic Mythologization in Gloria Anzaldúa’ Works.”『札幌大学女子短期大学部紀要』第 60・61 合併号，2013 年，95–123 頁。

Watanabe, Asami. “The Stories of Haitian Daughters: Disabled Bodies and Restoring Memory in Edwidge Danticat’s *Breath, Eyes, Memory*.”『札幌大学女子短期大学部紀要』第 56・57 合併号，2011 年，5–39 頁。

Waters, Mary C., et al., editors. *The New Americans: A Guide to Immigration Since 1965*. Harvard UP, 2007.

兼子歩，貴堂嘉之編著『「ヘイト」に抗するアメリカ史―マジョリティを問い直す』彩流社，2022 年。